# 「文化の恩恵は未だ民衆に及ばず、持って生れた生存権さへ自由に行使し得ないではないか ―文化生活運動に生涯をかけた消費経済学者―」

## 札幌農学校第十九期生　森本厚吉

森本 厚吉
Morimoto Kokichi

一八九〇年三月、舞鶴明倫高等小学校を卒業した森本厚吉（一八七七～一九五〇）は、東京進学の願望を抑えられず、翌秋、父母にその胸の内をうち明けた。

▼「東京に出て勉強しやうとする自分の熱望に同情してくれた母は、慣れない実業に手を出して三度も失敗した貧乏士族の主婦として他に金策を講ずるみちがなく、遂に自ら恥をしのんで、初めて質屋の暖簾をくぐつて漸く旅費を調達して呉れた（略）其翌々日旅路の門出を見送つてくれた母は辛ふじて告別の言葉を言ひ得たのみで、あとは只涙にむせんで居た」（『滅びゆく階級』一九二四年、四頁）

父母の慈愛に支えられて、森本厚吉は、横浜・東京での遊学を経て、一八九五年七月、札幌農学校予科に入学した。九七年九月同校本科に進学後、農業経済学を専攻した森本厚吉の眼差しは、自己の貧困から、当時人口の最大多数を占めた「農民」の貧困へと向けられた。

▼「余ノ笈ヲ負ヒテ札幌農学校ニ遊ビ農学ノ教授ヲ受クルヤ、農民ニ対シ益々多クノ同情ト趣味ヲ有スルニ至リ。爾来数年ニシテ脳裏ニ刻スル事愈々深キニ至レリ。日新ノ今日交通機関ノ発達ニ伴ヒ世界的経済ノ行ハルル時ニ当リ（略）我国大多数ヲ占ムル農民ノ憐ムベキ悲境ニアルヲ見、農業ノ改良発達ヲ画セントスル者久シカリシガ、之ヲ為スニ先ダチ、農ノ本体ナル農民ヲ深ク研究スルノ必要ヲ感ジ茲ニ本論ヲ艸スルニ至レリ」（卒業論文「農民ニ関スル研究」一九〇一年、句読点は引用者）

卒業後、米国留学を経た森本厚吉は、消費経済学者として母校で教鞭を執った。一九一〇年代、日本では「国民」の間に貧富の格差が拡大し、その深刻な現状に、森本厚吉は憤りを感じていた。

▼「如何に我国が世界五大強国の一つとして誇つて居ても、文化の恩恵は未だ民衆に及ばず、単に少数の特殊階級者や富豪に専用されて居るのみで、同胞の大多数は、持って生れた生活権さへ、自由に行使し得ないではないか」（『新生活研究』一九二二年、一～二頁）

森本厚吉は、すべての人には生存権があり、その先には、人間らしい文化的な生活を営む権利、すなわち生活権があると考えていた。

▼「生存（Existing）と生活（Living）とは決して同一のものではない。経済生活が生存より生活へ進んだ時、初めて人の持つて生れた生活能力が充分に発揮されて、茲に文化は開発され、人は意義ある生を楽しみ得るものであると確信する。旧時代に於ては、かゝる幸福な生活を営む事の出来る人は、極く少数の特殊階級者のみで、大多数の民は富の生産の為に必要な道具となり、一生貧しい暮をして、漸く露命をつなぎ生存さへして居ればよいと云ふ運命を有するものと考へて居つた。併し新時代

札幌農学校卒業記念（1901年）
私立北鳴学校出身の札幌農学校19期生。中列右端が森本厚吉
（大学文書館蔵）

Litterae Populiとはラテン語で「ポプラの手紙」という意味です。北海道大学（および、その前身である札幌農学校）にゆかりのある人々の言葉を「リテラポプリ」としてお届けします。

目次


**リテラポプリ** …… 2

「文化の恩恵は未だ民衆に及ばず、持って生れた生存権さへ自由に行使し得ないではないか —文化生活運動に生涯をかけた消費経済学者—」
札幌農学校第十九期生　森本厚吉
大学文書館　山本　美穂子

**特集：北大は法学・政治学で未来を築く** … 4

座談会
法学研究科　長谷川　晃
宮本　太郎
田村　善之
公共政策学連携研究部　中島　岳志

政治のダイナミズムを探る面白さ
法学研究科　吉田　徹

多様な国際社会で対話するための「ツール」— 国際法・国際環境法
公共政策学連携研究部　児矢野マリ

**施設探訪** …… 15

北部食堂
広報課　伊藤　仁浩

**虫と石⑩** …… 16

ヨトウガ
総合博物館　大原　昌宏
緑柱石（ベリル）
総合博物館　松枝　大治

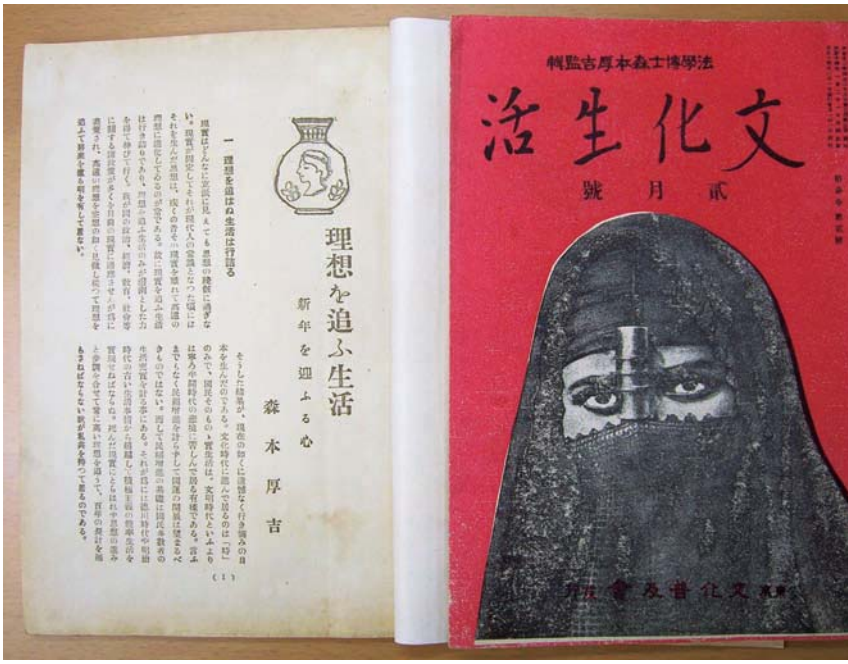
**もういちど北大と出会う〈その十九〉** …… 18

懐かしき新天地で
法学部1年　池上　恒太

**information** …… 19

**建築設計図が語る北大の歴史〈第20回〉** …… 20

南門（旧札幌農学校正門）
工学研究院　池上　重康


『文化生活』　文化生活運動を共にした親友 有島武郎（19期生）のほか、佐藤昌介（1期生）、新渡戸稲造（2期生）、松村松年（13期生）、星野勇三・半澤洵（19期生）など、札幌農学校の恩師・同窓生たちも『文化生活』への執筆に協力を惜しまなかった（大学文書館蔵）

に於ては、単に生存するのみでなく、能率の高い文化生活を営むべきもので、其の生活権を各人が立派に行使し得るものである事を当然と認むるのである」（『生存より生活へ』一九二二年、一～二頁）

一九二〇年、森本厚吉は、「文化生活研究会」を組織し、「生存より生活へ」をスローガンに、家庭における消費生活の改良から社会改造を実現させる「文化生活運動」を提唱した。

▼「現代文化の要求は社会の根本的改造であるが其の基調は個人の改造である（略）個人の改造は先づ各自が人格を尊重し天与の生活権を自覚することに始まらねばならぬ（略）民衆をして文化生活を営ましめよと云ふことが現代文化の開発に必要な第一声である」（前掲『生存より生活へ』第一章の一～二頁）

森本厚吉は、衣食住等の消費生活を科学的に徹底分析して、「斯くあるべきである」という「生活標準（The Standard of Living）」を設定し、それに応じた経済的・合理的な生活設計を家庭で営むように推奨した。

そのために、一九二一年啓蒙雑誌『文化生活』を発刊し、二六年日本初の洋式集合住宅「文化アパートメント」を開館して、具体的な文化生活モデルを提示した。二七年には「女子文化高等学院」も創設し、運動の重要な担い手を育成した。

消費経済学をはじめ、社会科学は「生きた人間」が対象だからこそ、「その研究の結果がひいては人類を幸福にし社会を益するものであらねばならない」（「現代社会と社会科学研究法の根本的誤謬」一九二七年三月一八日付『北海道帝国大学新聞』二面）との理念からであった。

一九三二年三月、森本厚吉は、「文化生活運動」に専心するため、惜しまれつつ北海道帝国大学教授を辞した。「私の一生の目的の一は親の敵討即ち貧乏退治をする事で此の大きな目的の為に私は奮闘の生涯を社会改造の為に送らう」（前掲書）との信念を貫いた決断であった。

大学文書館　山本　美穂子
Yamamoto Mihoko